紹介

浅見和彦著『東国文学史序説』

権守仁紀

「東国を東国として見ていく。少しでも東国に光をあてたい。」浅見和彦氏によって出版された『東国文学史序説』は、そうした氏の強い思いが込められた大著である。この言葉は、東日本大震災で被災された方々へ向けての言葉であると同時に、あまり光の当てられて来なかった、東国の民へ向けての言葉だ。長年、東国を見つめてきた氏だからこそ言える言葉である。本書は、書き下ろしの論文と共に、一九九二年から現在に至るまで氏が発表してきた論文が纏められている。構成としては、序章に始まり、第一部、第二部となっているが、その扱う地域は広大で、時代も幅広い。少しずつではあるが、紹介させていただく。

まず序章では、第一節「視角としての「東国」―風巻景次郎と西郷信綱」で東国文学論の先駆者である風巻景次郎氏、西郷信綱氏の二人を挙げ、両氏がそれぞれの視点で東国を見つめ、論じてきたかを知ることができる。第二節「「東国」の範囲」では、「東国」＝「あづま」は北陸道をも含んだ広大な地域を指すことを論じている。この序章に通じていることは、東国が都という中央から外れ、時には従属させられた地域であるという事実である。冒頭の氏の言葉は、今までいかに文化の中心であった中央（都）からしか東国を見ていなかったかということを物語っているのである。

次に第一部「東国文学の古代」は、第一章「東国の地域伝承」と第二章「「東国」観の変遷」で構成されており、第一章には六節の論稿が並ぶ。中でも、第三節「毛野国をめぐって」は個人的に私が栃木県（下野国）出身ということもあって、非常に興味深い内容であった。現在の栃木県と群馬県（上野国）は関東の下位争いでライバル関係にあり、特に栃木県は全国でも存在感が薄い県と言われている。しかし、かつては大和政権から一定の独立性を持ち、対抗する力を持っていたというのである。また、仏教先進地帯としても盛んで、下野国薬師寺が三戒壇の一つとして設けられたことや、天台座主に東国、毛野国関係者が多いこと、そして「坂東の大学」として作られた足利学校を挙げ、「毛野の両毛地域がいかに仏教的、文化的伝統に於て他より傑出していた」かを論じている。

続いて第二章では、三節の論稿が並ぶ。『源氏物語』などでは、東国に対して冷酷な視点がある一方、和泉式部をはじめとする王朝女流歌人や能因、藤原保昌、橘為仲などの代表的な歌人によって東国は歌枕の地としてよく詠まれ、多くの関心を集めた地でもあったことがわかる。氏はさらに、その東国の魅力を「東国の力であり、東国の持っていた可能性」と述べ、鎌倉幕府成立へと導いたと論じている。

第二部「東国文学の中世」では、第一章「東国の作者たち」について六節論じられているが、ここでは第一節の「長明と実朝」を紹介したい。『吾妻鏡』によると、鴨長明が源実朝に謁見したのは建

暦元年（一二一一）であると言われているが、この二人の間で密接に関わっていたのが飛鳥井雅経と大江広元であったという。さらに、長明の『方丈記』と実朝の『金槐和歌集』に取り上げられている親子の愛情について考察され、若い頃に父を亡くしている両者の共通点を指摘している。そこから、従来否定的に見られていた長明の鎌倉下向、実朝への拝謁についても言及され、『方丈記』は実朝を読者の一人として意識していたのではないかという可能性も示唆している点は注目すべき点で、先行研究に流されずに、一度踏みとどまって考えてみる姿勢を私は教わった気がした。

第二章「東国の説話世界」には七節もの論稿が並ぶ。特に第六節の「女の大力―東国女の系譜」は拝読していてとても面白い。『伊勢物語』第一四段で男へ「桑子」や「くたかけ」という詞で歌を詠んだ女と、『源氏物語』で「大御大壺取り（便所掃除）」を喜んで行おうとする近江の君を挙げ、彼女らは都側から見ると嘲笑の的であったという。それは前にも述べたように、都側からの東国への侮蔑と嘲笑の視点があったからである。しかし、氏は『平家物語』の巴御前や『吾妻鏡』にある北条政子、さらに『万葉集』の東歌、『今昔物語集』や『古今著聞集』の大力の女を引き合いに出し、「こうした女たちの能力は、東国社会ではもっとも望ましい、願わしいものであった」と論じ、加えて「女の大力」という言葉の豊かさを再検証する必要性を説いている。

以上のように、紹介者の未熟さゆえ全く本書の魅力を伝えることは叶わなかった。だが最後に、本書は『東国文学史〝序説〟』と名付けられている。この大著は東国文学史研究の夜明けを知らせ、今後の研究の道標であることに間違いはない。東国を東国として見、そして東国から日本を見る姿勢が今後求められるのではないだろうか。

（二〇一二年三月二十七日発行　五三六頁　一二五〇〇円＋税　岩波書店）

（ごんもり・まさのり　大学院博士前期課程在学）